

せま 第2章 迫りくる戦火

まんがでたどる北区と戦争 第2話

昭和19年(1944)
7月
サイパンが陥落して
空襲の危険が増してきたの...

マリアナ諸島・サイパン

「少国民」である子どもたちを守るため

疎開が始まったのよ

ソカイ???

6年生 3年生

学童集団
疎開といって
子どもたちを
空襲から遠ざける
ために
地方へ
集団で
避難
させたの

別に、
家族単位で
縁故疎開する
人も
いたわ:

都市 ← 地方

残った大人たちは、
日本での
決戦に
むけて

訓練とか
していた
そうだ...

竹やり

竹やりで
戦うのいっ

群馬県

赤羽駅から
汽車でいったの

群馬県に
疎開した

北区

静岡県

沼津市

静岡県の
沼津市に
疎開した学校も
あるわ

主に
北区の子どもたちは
群馬県のお寺や旅館に
疎開していたんだよ



当時 誰にも
言えなかった
そうなんだけど
風船爆弾を
つくっていたん
ですって…

女学生だった
近所のお姉さんは
陸軍の工場で
働くことになっ
て



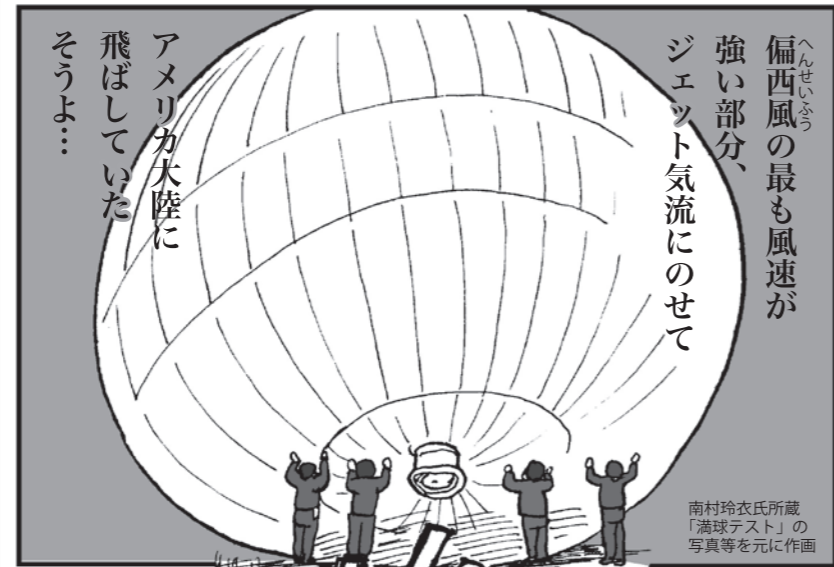
風船爆弾は
昭和19年(1944)11月から
昭和20年(1945)3月まで
約9300個あまりが
千葉県、茨城県、福島県から
飛ばされた



そこに
爆弾を
つけて



コンニャク糊で
和紙を
貼り合わせて
気球を
つくり



偏西風の最も風速が
強い部分、
ジェット気流にのせて
アメリカ大陸に
飛ばしていた
そうよ…

南村玲衣氏所蔵
「満球テスト」の
写真等を元に作画



ピクニックに来ていた
少年たちと牧師の妻6名が
亡くなった

犠牲者も
たくさん



昭和20年(1945)5月5日
オレゴン州ブライ近郊
実際に
いくつかの
風船爆弾は
アメリカに
着いたの…
そして

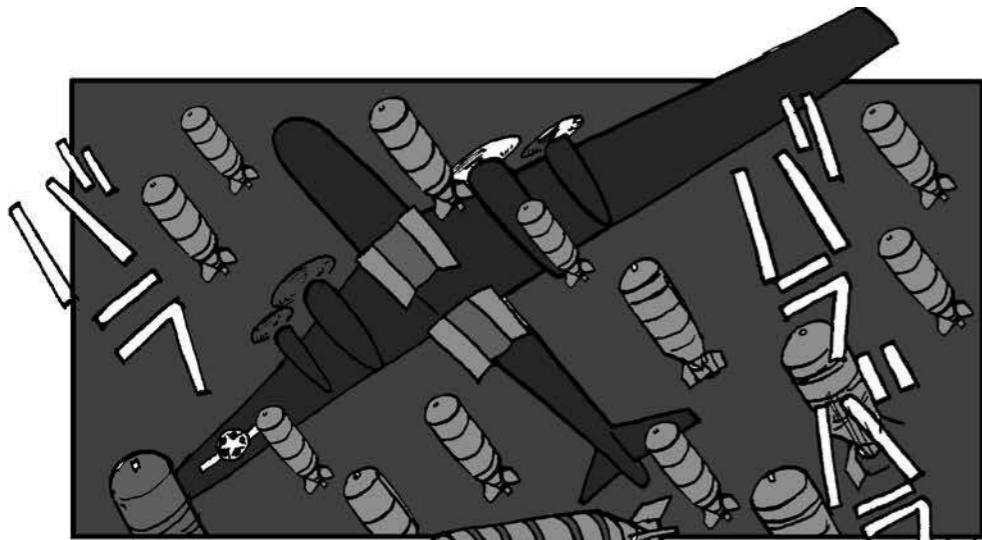


農家さんの
手伝いを
やった
り…
水汲みしたり…
自分の服を
洗ったり…
乾布摩擦で
体を鍛え
たり
お風呂は
毎日
入れな
かったなあ
…

神谷国民学校の疎開先群馬県長学寺寮にて炊事当番(鈴木和子氏提供) 写真などを参考に作画



群馬県内
おもひ疎開先
昭和14年(1939)の地図をもとに
作成



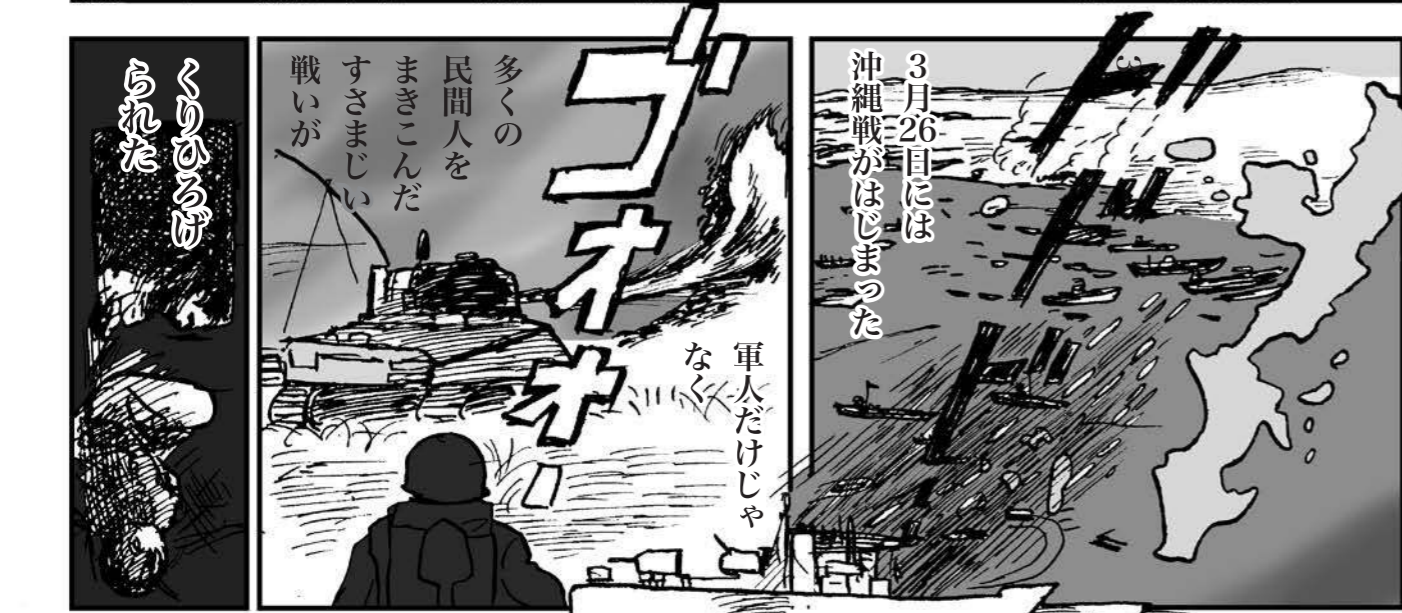
そして
3月10日
東京大空襲の日を
むかえたんだ...



日本の
木造家屋を
燃やすために
開発された焼夷弾が
たくさん
落とされて...



約一〇万人が
亡くなった



多くの
民間人を
まきこんだ
すさまじい
戦いが

ゴ
オ
オ

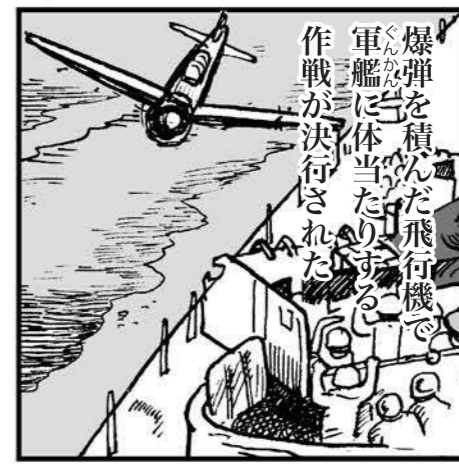
軍人だけじゃ
なく

3月26日には
沖繩戦がはじまった

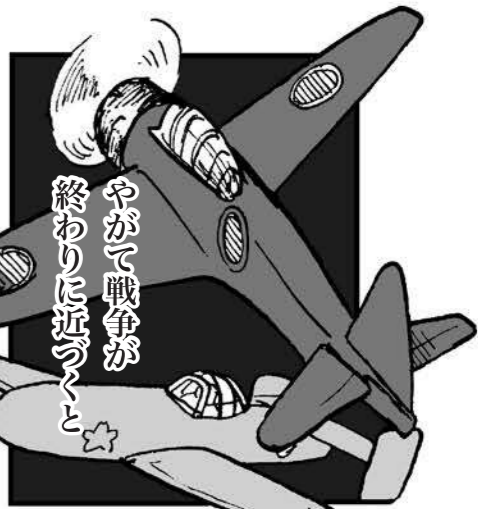
くりひらび
られた



体当たりを行う
部隊は
神風特別攻撃隊と
呼ばれていたよ



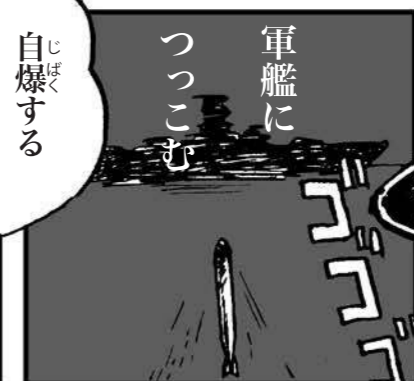
爆弾を積んだ飛行機が
軍艦に体当たりする
作戦が行われた



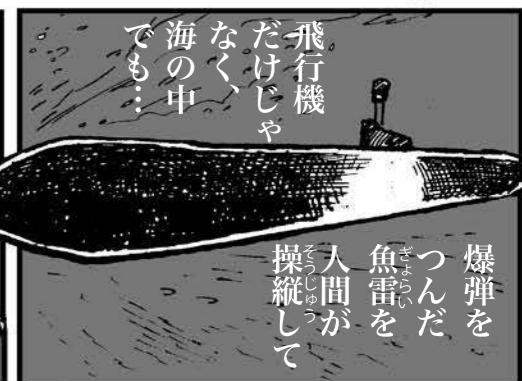
やがて戦争が
終わりに近づくと



自爆する
作戦が
行われ
たんだ



軍艦に
つつこむ



飛行機
だけじゃ
なく、
海の中
でも...

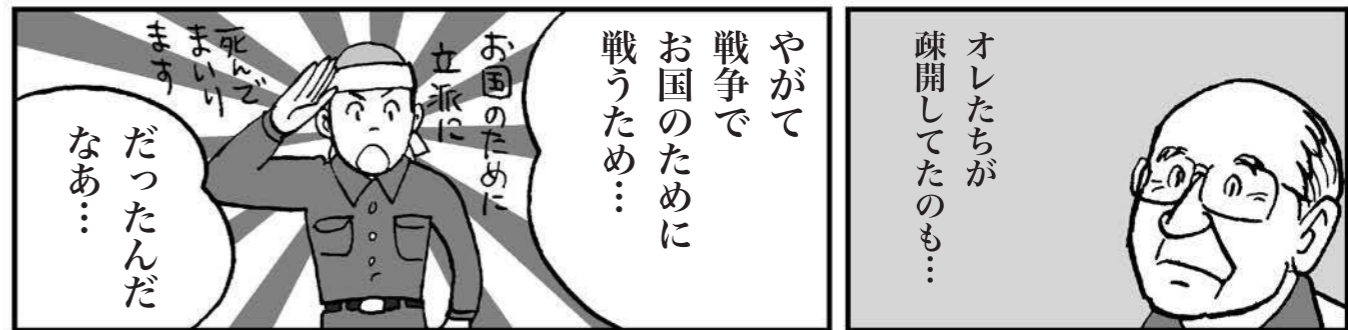
爆弾を
つんだ
魚雷を
人間が
操縦して



そんなこと
したら、

死んじやう
よね!?

そうだ
ね...



オレたちが
疎開してたのも...

やがて
戦争で
お国のために
戦うため...

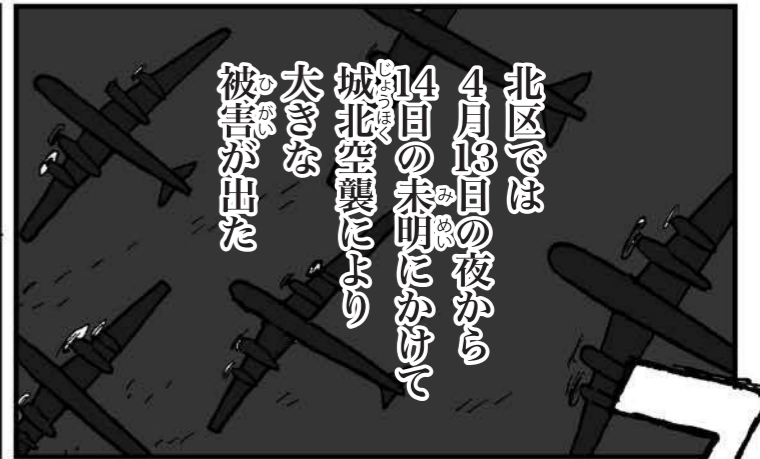
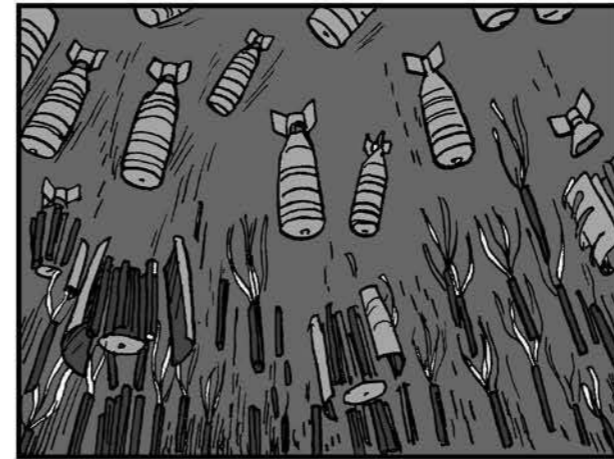
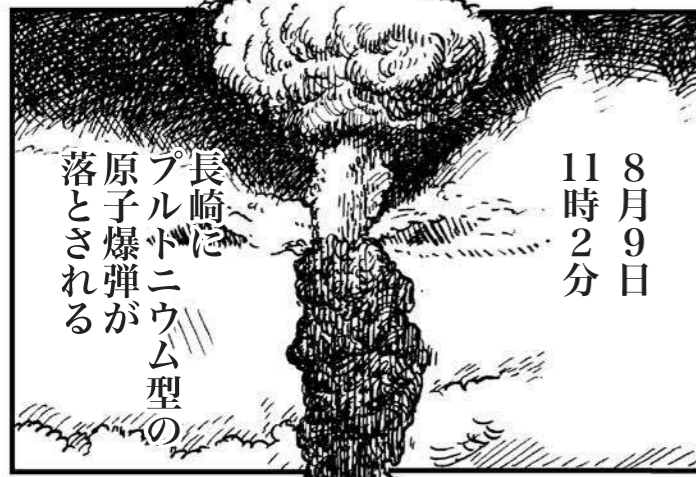
死んで
ます
だったんだ
なあ...



昭和20年
(1945)

オレたちは
学校卒業にあわせて
3月に

かあ
ちゃん
!疎開先
から
北区の
家に
戻って
きた
和雄!





空襲へのそなえ

飛行機から銃や爆弾、焼夷弾などで空から攻撃することを空襲といいます。空襲にどう準備するかを定めた「防空法」が昭和12年（1937）に制定され、二つの点が重視されました。

一つは、灯火管制です。夜、窓からもれた光が敵の飛行機が目印にならないよう、各家では、夜は電灯に黒い布をかけたり、笠をかぶせるなどして光が広がらないようにし、側面が黒くぬられて真下しか照らさない電球も考えられました。

もう一つは消火です。空襲で火事が発生した時に備えて、火を消すための道具「火たたき」を、出入り口や庭先など、すぐ使えるところに準備しました。火たたきは、長い竹ざおの先に手ぬぐいをさいた布やなわを巻いたもので、水でぬらして火をたたいて消します。家の外には「防火水そう」に水をためて備えました。隣組で協力して火事を消すための訓練もたびたび行われました。はじめは、火事が起きたらすぐに近所の人たちで消火する方針でしたが、実際に空襲を受けると、火たたきや水そうの水だけで火事を消すことは難しく、空襲を受けたら避難する方針に変わりました。消火の訓練とあわせて、毒ガスの爆弾が落とされた時のために、防毒マスクをつける訓練も行われました。

昭和19年（1944）からは、建物を強制的にこわして空き地をつくる、建物疎開も行われました。

column コラム

戦争に利用された紙しばい

「クウシフ」（読み方：クウシユウ）は、昭和18年（1943）11月に発行（全甲社紙芝居刊行会）された幼児向けの国策紙しばい（内務省防空局指導）の一つです。「とりの国」と「けもの国」が戦争し、とりの国の爆撃機が落とす焼夷弾から身を守るため、けもの国の子どもたちがやらねばならないこと、してはいけないことなどがわかりやすく描かれています。こうした国策紙しばいには、戦争を支えるための生活の仕方や体力の向上を呼びかけるものなど、戦争への備えを高める役割があり、子どもたちをたくさん集め、施設や学校単位で上演されました。

紙しばいは全部で20枚あります。そのうちの5枚を紹介します。



とりの国の爆撃機



表紙



けもの国の隣組の子どもたちが防空壕に避難



避難所に向かう子どもたち



隣組で消火活動



紙しばいを見る子どもたち



防毒マスク

昭和10年代

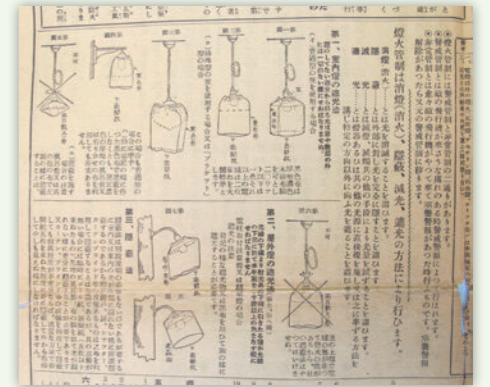
吸収缶を通して毒ガスがろ過された空気を吸う仕組み。赤羽北に防毒マスクの製造工場があった。



防空電灯笠と電球

昭和10年代

子どもたちは電灯の真下にちやぶ台を持ってきて勉強した。



防空に関する市民心得

昭和11年（1936）

解説図を参考に、各家で電灯に布や笠をかぶせた。



防火訓練の様子

昭和10年代 田辺弘子氏提供

田端で行われた訓練。一列になった女性が水を入れたバケツをリレーしている。



雑誌に載せられた防空のためのふだんの準備

昭和18年（1943）

（「写真週報」）各家での防空方法を解説した雑誌が多数出版された。



防空壕

防空壕は、敵の飛行機からの攻撃や爆弾が落ちたときの激しい風から身を守るため、地面に穴をほってつくった避難場所です。敵の飛行機が飛んできたことを知らせる空襲警報が鳴ると、近くの防空壕に入りました。

昭和18年(1943)ころから、家のゆか下や庭先、学校の校庭、工場の空き地、大きな道路や線路沿いなど、身の回りにたくさん防空壕がつくられました。学校では、校庭や校舎のゆか下に防空壕をほりました。1メートルほど穴をほっただけの防空壕もあれば、深くほった穴のかべに板を打って倉庫のようにつくったものもありました。

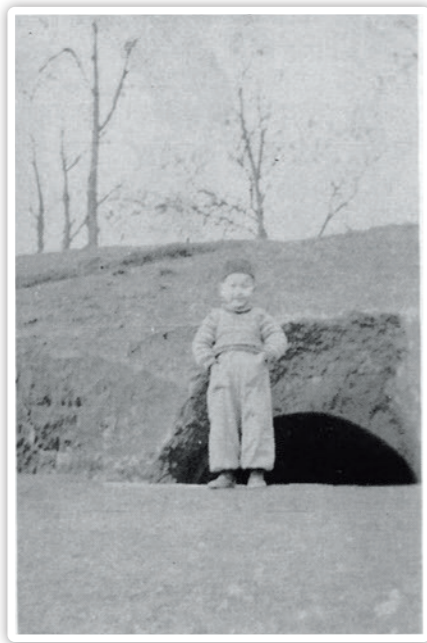
防空壕の作り方が図入りで説明されたパンフレットもつくられ、そこでは、防空壕に入る時には鉄かぶとや防空頭巾をかぶって頭を守るようにし、たたみや板で穴の上からふたをするように説明されていました。しかし、空襲でにげこんだ防空壕から出られなくなったり、防空壕がつぶれてそのまま亡くなる人もいました。

戦争が終わると、家庭や学校につくられた防空壕の多くはうめられ、野菜をつくる畑などになりました。がけに横穴をほってつくった防空壕も、くずれて危険なため、現在はほとんどがうめられています。

飛鳥山の防空壕

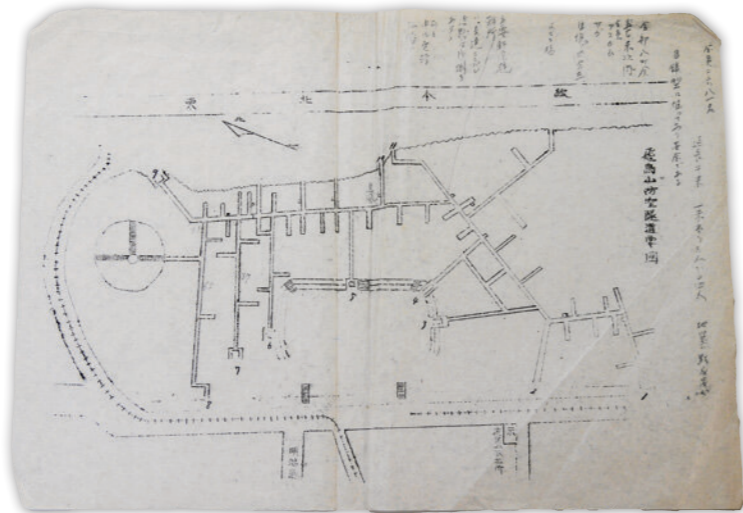
北区の地形は、低地と武蔵野台地の高台からなり、坂が多くみられます。そのため、武蔵野台地のがけに横穴をほった防空壕が多くつくられました。飛鳥山にも、横穴式の防空壕がつくられました。滝野川馬場自治会が保存していた図面を見ると、西側に7ヶ所、東側に3ヶ所の入口があり、飛鳥山の地中にトンネルのように長い横穴がつくられていたことが分かります。飛鳥山の東側は、すぐ近くに王子駅や線路が通っているので、警報が鳴ったら電車から飛び降りて避難できるよう、入口があつたでしょう。本郷通りや飛鳥山のグラウンドから入る西側の入口は、近くに住む町の人々が避難するための防空壕でした。どこの町の人はこの入口を使うのか、あらかじめ決められていたことが、図面への書き込みから分かります。

column コラム



飛鳥山の防空壕
滝野川第三小学校創立70周年記念誌

この迷路のような飛鳥山防空壕は、昭和19年(1944)の夏に、板橋区にあった中学校の生徒たちが勤労働員でまわっていました。地中にレールを引き、トロッキ(手おし車)で土を運び出しました。近所の子どもたちがこっそりトロッキを走らせて遊んだこともありましたが、戦争が終わると、防空壕はすべてうめられ、いまではその入口も分からなくなっています。



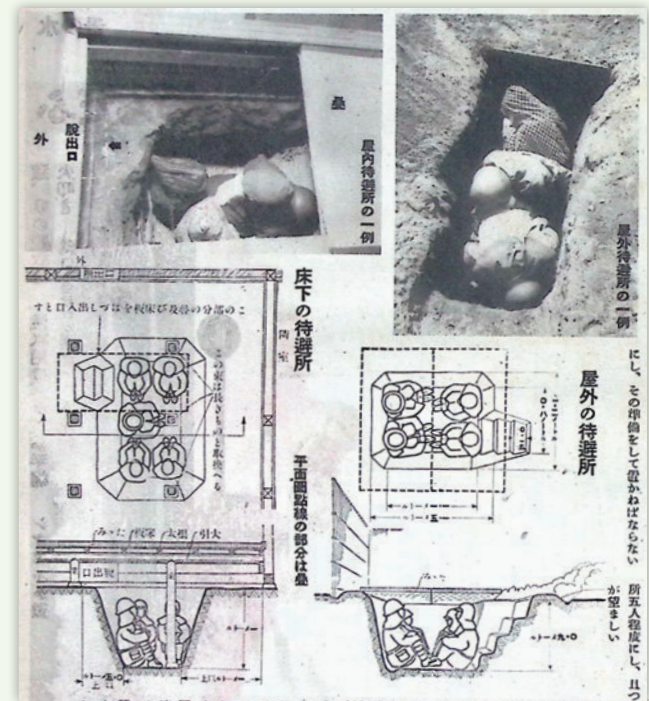
飛鳥山防空隧道要図
昭和19年(1944)ころ
滝野川馬場自治会文書
北区立中央図書館蔵



滝野川第三国民学校の校庭に掘られた防空壕
昭和10年代(滝野川第三小学校創立六十周年記念誌)
多くの児童が避難するため、各学校には長い防空壕がつくられた。



北区に残る防空壕
昭和10年代(令和7年撮影)
上)赤羽台さくら並木公園にて。入り口からは、だんだんと下っていく穴の様子が見える。
下)滝野川小学校前に残る防空壕。(中には入れません)



防空壕の作り方
昭和18年(1943)('写真週報')
各家ではゆか下や庭をほって防空壕をつくった。



空襲の被害

昭和17年（1942）4月18日に日本は最初の空襲を受けました（ドーリットル空襲）。アメリカ軍の飛行機B25が東京・横須賀・名古屋などに爆弾を落とし、北区では神谷、赤羽西、赤羽台、桐ヶ丘で低く飛びながら焼夷弾を落としました。

もともと空襲は、敵の基地や軍の工場などをねらって攻撃するものでしたが、次第に住宅や学校も無差別に攻撃されるようになりまし。また、飛行機から銃でねらう攻撃もたびたびあり、大人だけでなく子どもたちもねらわれました。

敵の飛行機がやってくるのがわかると、長いサイレンの警戒警報が鳴り、飛行機が接近し空襲警報になると、より大きな音で短いサイレンがくり返し鳴らされます。昭和19年（1944）になると東京での空襲は激しくなり、毎日のように警報が鳴らされました。翌年3月10日には、墨田区・台東区・江東区に多くの焼夷弾が落とされ、10万人以上が亡くなり、北区でも田端・西ヶ原に焼夷弾が落とされました（東京大空襲）。4月13日の夜中から翌日の朝には、豊島区・板橋区・荒川区・足立区、そして北区全域が大規模な空襲を受けました（城北空襲）。8月10日には十条仲原から赤羽西にかけて1トン爆弾が落とされました。赤羽西の香取神社では防空壕がつぶれて多くの人が亡くなりました。8月15日の終戦の5日前のことでした。

Fさん（当時17才）
こわかったはじめての空襲

「昭和17年4月18日、女学校にいたときに、はじめて空襲を経験しました。空襲警報が鳴り出してすぐに敵の飛行機が飛んできました。そのころはまだ防空壕もなかったもので、先生の指示であわてて階段の下やげた箱のかげにかくれました。物干しざおでつつけば届きそうなくらい低空で飛んできたので、こわさとおどろきで女生徒たちはみんな泣いていました。」

Hさん（当時12才）
必死でにげた城北空襲

「昭和20年4月13日の夜、警戒警報がでたと思ったらすぐに空襲警報に変わり、B29が飛んでくる音が聞こえてきた。飛び起きて防空頭巾をかぶり、非常食、教科書、衣類の入ったリュックをかついで家を飛び出した。まもなく焼夷弾が雨のように降ってきた。道ばたで亡くなっている人たちを見ながら、必死で姉たちと志茂の熊野神社の森ににげた。3月に学童疎開先から帰宅したばかりだったので（何のために疎開したんだろう、これじゃあ空襲にあうために疎開から帰ってきたようなものだ）と思った。」

Kさん（当時17才）
焼け野原の王子

「空襲のあと王子駅までいったところ、一面の焼け野原になっていて、足立区の方までよく見えた。横穴防空壕があった飛鳥山の上だけには、木々が焼け残っていた。」

Mさん（当時8才）
飛行機からねらわれる！

「昭和19年の春、袋国民学校から集団下校中に空襲警報になった。一人おかれてしまい、走って帰っていたが、浮間橋のところまで敵の飛行機から銃でねらわれてしまった。防空頭巾をかぶり浮間橋の柱にしがみついていたが、体のすぐそばをダダダッと撃って飛行機は遠ざかっていった。けがもせずに生きているのが不思議な気がした。」



城北空襲前の王子神社
昭和20年（1945）以前 大岡家提供
大鳥居の奥に立派な山門が写っている。大木が神社をかこんでいた。



終戦後まもない王子神社
昭和22年（1947）ころ 倉田正義氏撮影
空襲で山門や社殿、森などが焼けてしまったが、その後地元の人たちとともに社殿を再建した。写真右側に写っているのは、焼けずに残った大イチョウで、今も葉をしげらせている。

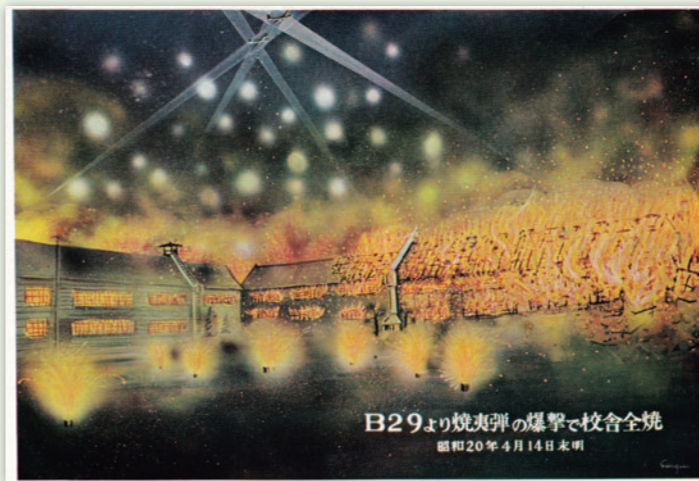


戦後の爆弾掘出し写真
昭和57年（1982）
東十条で発見された1トン爆弾。



城北空襲で落とされた焼夷弾
昭和20年（1945）
北区で拾われ保管されたもの。発見されたときは、焼夷弾の落下姿勢を安定させるために付けられた麻布のリボンも残っていた。

空襲で家を焼かれたことの証明書と保管袋
昭和18～20年（1943～45）ころ
空襲で家や財産が燃えてしまった人は、隣組長から空襲被害を受けたことの証明書を受け取った。この証明書で、お米、みそ、しょう油などを受け取ることもできた。



関口五郎氏画「堀船小校舎全焼」
昭和40年代か（『堀船小学校50年誌』所収）
堀船国民小学校の卒業生が描いた、空襲の様子。焼夷弾により校舎が燃えている。上空からはアメリカ軍の飛行機B29から焼夷弾が落とされている。



北区の戦災焼失区域



凡例

焼失区域

建物疎開区域

爆弾投下区域 ×××

『真赤な空は忘れられない』(北区)所収
 「北区戦災区域図」および
 「滝野川区全図(建物疎開図)」より作成
 ※上記の各区域については不明な点が多
 くあります。本図は令和8年2月末
 現在わかる範囲で図示しています。



空襲の爪あと



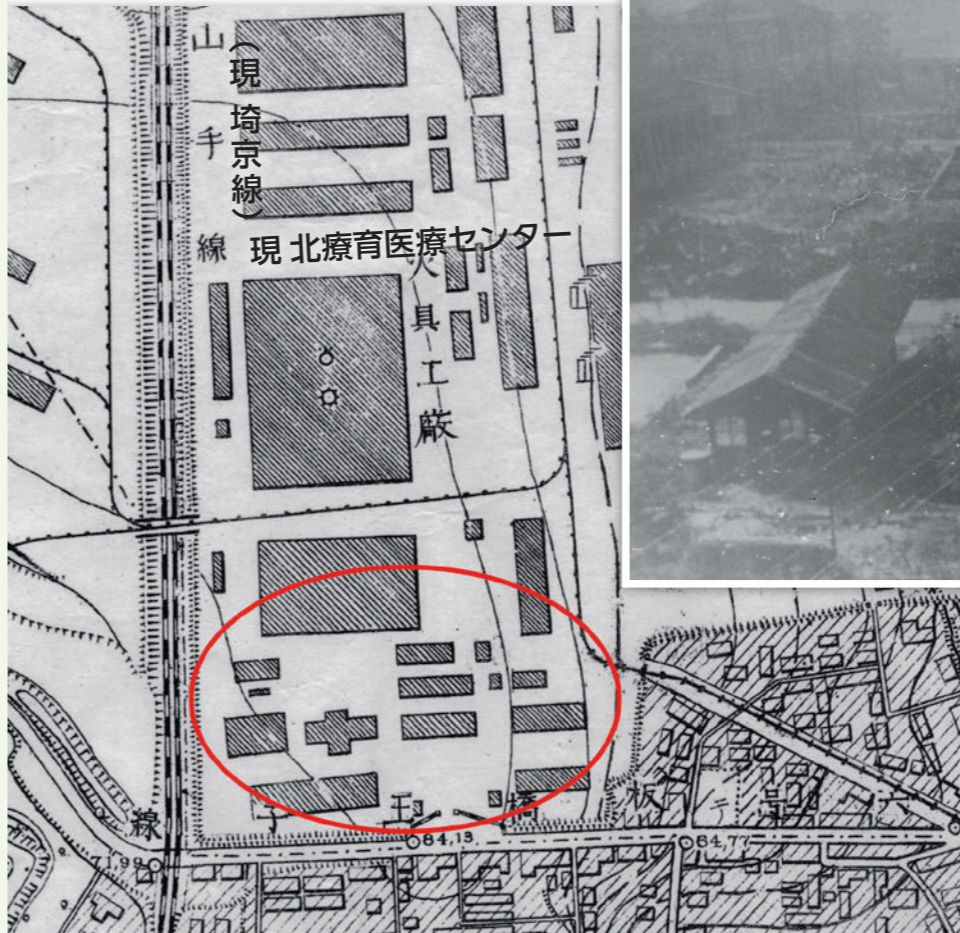
昭和22年(1947) 王子駅付近
(地図「王子」より)

空襲直後の王子駅前
昭和20年(1945)4月14日 石川光陽氏撮影
城北空襲のあとは王子から豊島方面にかけて焼け野原になっていた。
※赤線で囲った付近が撮影場所と思われる範囲。



空襲を受けた後の陸軍造兵廠内の建物
昭和20年(1945) 石橋幸一氏撮影
現在の北特別支援学校(十条台1-2)付近。
建物の土台だけが残る場所もある。

昭和22年(1947) 十条台付近
(地図「西巣鴨北部」より)



子どもたちの苦難

昭和19年(1944)になると、いよいよ東京への空襲が激しくなりました。そのため、同年6月30日、子どもたちの命を守るため、国民学校初等科児童の3年生から6年生までを都市部から安全な地方へ一時避難させることになりました(学童集団疎開)。地方に親せきがいる家はそれぞれ避難し、いない場合は学校ごとに集団で疎開することになり、8月中の疎開に向けて学校は準備に追われました。

東京都の学校の疎開先は関東地方のほか山形県や新潟県、長野県、山梨県におよびましたが、北区内の学校の疎開先は主に群馬県の寺や旅館でした。疎開先に着いたときは友好的に迎えられました。疎開先での生活が始まると遠慮気分は消えて、夜になるとさみしくなると布団のなかで泣く子どももいたようです。

疎開先での日々は厳しく、朝6時に起こされ、軍隊式の朝礼のあとは避難訓練やそうじ、マキ運びなどの作業が中心で、授業時間はわずかでした。また、疎開先でも食料は豊富とはいえず、主食の配給も少なくなると、子どもたちはいつもお腹をすかせていました。子どもたちは親との面会を待ちわびましたが、親も疎開先までたびたび出向くことはできず、会えない日々が続きました。



疎開先に到着した王子第二国民学校の児童たち
昭和19年(1944)
下仁田町に到着した児童たちは、下仁田町の青年団からもらったトウモロコシを手にして、笑顔を見せている。

- 一 集団疎開した滝野川国民学校
第三学年の児童のアンケートから
- 一 一番ウレシキタ事
自家カラ面会人が来タ時
- 一 一番イヤナ事
朝ノカケ足ト午後ノタンレン
- 一 食事ニツイテ
飯ガ不足



疎開先の堀船国民学校の児童たち
昭和19~20年(1944-45)
同校の3年生男子は群馬県古巻村の神宮寺に疎開した。先生(前列中央)が記した日誌からは食料が十分でない様子が伝わってくる。



迫りくる戦火

疎開先での生活

昭和20年（1945）当時、滝野川国民学校（現在の滝野川小学校）6年生の児童が書いた「集団疎開大雲寺日記」から一部を紹介します。

昭和二十年

四月三十日 今日学校へ行ったら空襲警報になったので分散して山の木かげで勉強した。解じよになったので、教室へ入ったら再報が鳴ったので寮に帰った。午後せりを取りに行った。今日は田ゼリというのが、みんなで五かご取れた。大戦果。

六月十五日 今日の前中は*松根油の薪運びをやった。これもお国の為と思つたら、一ぱ背負えた。けれど重い。背中の皮がすりむけた。かなわない。午後は一部は島の草取り、残りはなっぱ洗いをやった。僕達は岡穂の島の草むしりをやった。

七月十日 今日の前中は行事をやっていたら空襲になって高射砲の音がしたので、山へたいひしたが、ふたたび空襲になったので、班ごとに二列になって五十米の間をおいて寮へ帰った。午後は昼寝をした。又空襲になった。このごろはよく空襲があるのでめんどくさい。

*松根油：松の根から得られる油。太平洋戦争中、政府は松根油を航空機の燃料として代用しようと、学生や女性・子ども・高齢者まで動員して松の根を集めた。

王子区・滝野川区の学童集団疎開先

（疎開先はほとんど群馬県でした。滝野川区の一部のみが静岡県沼津市に疎開しました。）

◆王子区

国民学校名	疎開先所在地	疎開先
王子	多野郡神流村	観音寺
	多野郡小野村	泉通寺
	多野郡藤岡町	西蓮寺
	多野郡藤岡町	天竜寺
	多野郡藤岡町	成道寺
	多野郡藤岡町	良信寺
	多野郡藤岡町	龍源寺
	多野郡美土里村	宗永寺
王子第一	勢多郡東村	祥禅寺
	勢多郡黒保根村	常鑑寺
	勢多郡宮城村	金剛寺
	勢多郡粕川村	龍源寺
	勢多郡粕川村	東寿寺
	勢多郡粕川村	竜光寺
	勢多郡粕川村	千手院
	勢多郡大胡町	長興寺
王子第二	北甘楽郡下仁田町	新杉原館
	北甘楽郡下仁田町	下仁田館
	北甘楽郡下仁田町	常盤館
	北甘楽郡富岡町	美濃屋
	北甘楽郡富岡町	源氏
	北甘楽郡富岡町	万屋
王子第三	群馬郡伊香保町	森秋館
	群馬郡伊香保町	塚越館
	群馬郡伊香保町	粕屋
	勢多郡富士見村	長桂寺
	群馬郡豊秋村	光運寺
	群馬郡金島村	宗光寺
	群馬郡伊香保町	丸本
	群馬郡伊香保町	粕屋
王子第四	群馬郡渋川町	真光寺
	群馬郡渋川町	林徳寺
	群馬郡渋川町	良珊寺
	群馬郡渋川町	正蓮寺
王子第五	群馬郡伊香保町	福一
	群馬郡伊香保町	香月館
	群馬郡伊香保町	市川旅館
	群馬郡伊香保町	油屋
	群馬県伊香保町	叶屋
	群馬県伊香保町	立花屋
王子赤羽	群馬郡伊香保町	大森館
	群馬郡伊香保町	青山旅館
	群馬郡伊香保町	金田屋
	群馬郡伊香保町	丸本旅館
	群馬郡伊香保町	立花屋
	群馬郡伊香保町	ふじのや
	群馬郡伊香保町	叶屋
	群馬郡伊香保町	油屋
	群馬郡伊香保町	福善旅館
	勢多郡黒保根村	常鑑寺
	勢多郡黒保根村	医光寺
	勢多郡東村	祥禅寺
	群馬郡伊香保町	石坂
	群馬郡伊香保町	青山
豊川	勢多郡桂萱村	竜沢寺
	勢多郡桂萱村	玉蔵院
	勢多郡南橋村	日輪寺
	勢多郡南橋村	宝林寺
	勢多郡大胡町	長善院
	勢多郡大胡町	金蔵院
	群馬郡総社町	光蔵寺
	群馬郡総社町	元景寺

国民学校名	疎開先所在地	疎開先
荒川	勢多郡黒保根村	梨木館
堀船	勢多郡富士見村	大聖寺
	群馬郡古巻村	竜伝寺
	群馬郡古巻村	神宮寺
	勢多郡北橋村	雙玄寺
	勢多郡横野村	宗玄寺
	勢多郡横野村	興禅寺
	群馬郡豊秋村	光運寺
	北甘楽郡下仁田町	常住寺
	北甘楽郡下仁田町	中村屋
柳田	群馬郡伊香保町	岸権
	群馬郡伊香保町	石坂旅館
	群馬郡伊香保町	金太夫
	群馬郡伊香保町	福善
	群馬郡伊香保町	吉田屋
	多野郡多胡村	仁叟寺
下十条	群馬郡伊香保町	干明
	群馬郡伊香保町	金太夫
	群馬郡伊香保町	ふじのや
	群馬郡伊香保町	新井屋
	群馬郡伊香保町	木村屋
	多野郡小野村	崇近寺
	多野郡神流村	観音寺
姥ヶ橋	群馬郡伊香保町	古久屋
	群馬郡伊香保町	村松旅館
	群馬郡伊香保町	市川
	北甘楽郡下仁田町	常住寺
清水	群馬郡伊香保町	横手館
	群馬郡伊香保町	新井屋
	群馬郡伊香保町	吉田屋
	群馬郡伊香保町	金田屋
	勢多郡桂萱村	竜沢寺
	勢多郡桂萱村	玉蔵院
岩淵	群馬郡室田町	榛名協会(7件)
	群馬郡室田町	下室田第一
	群馬郡室田町	下室田第二
	群馬郡室田町	滝不動
	群馬郡久留馬村	長信寺
	群馬郡久留馬村	高源寺
	北甘楽郡富岡町	永心寺
	北甘楽郡富岡町	金剛院
	北甘楽郡富岡町	寿福寺
第二岩淵	北甘楽郡小幡町	宝積寺
	北甘楽郡小幡町	長厳寺
	北甘楽郡小幡町	福厳寺
	北甘楽郡小幡町	興厳寺
	北甘楽郡新屋村	向陽寺
	多野郡吉井町	愿行寺
	多野郡吉井町	法林寺
	多野郡多胡村	仁叟寺
	多野郡多胡村	仁叟寺
第三岩淵	群馬郡伊香保町	木暮旅館
	群馬郡伊香保町	木村屋
	群馬郡伊香保町	大森
	群馬郡伊香保町	香月
	北甘楽郡下仁田町	下仁田館
	多野郡吉井町	玄太寺
第四岩淵	多野郡平井村	仙蔵寺
	多野郡平井村	高源寺
	多野郡平井村	常光寺
	多野郡鬼石町	神水館
	多野郡鬼石町	浦部館
	多野郡鬼石町	八塩館

◆滝野川区

国民学校名	疎開先所在地	疎開先
滝野川	静岡県獅子浜	本能寺 (静岡県立沼津学園)
	吾妻郡沢田村	四万館
	吾妻郡沢田村	竹葉館
	吾妻郡坂上村	大運寺
滝野川第一	吾妻郡原町	原町公会堂
	吾妻郡原町	古久家
	吾妻郡名久田村	宗学寺
	吾妻郡沢田村	賽陵館
	吾妻郡沢田村	田村別館
滝野川第二	吾妻郡沢田村	田村旅館
	吾妻郡中之条町	竹廬舎
	吾妻郡中之条町	鍋屋
滝野川第三	吾妻郡沢田村	鐘寿館
	吾妻郡高山村	雙松寺
滝野川第四	吾妻郡沢田村	積善館
	吾妻郡沢田村	宗本寺
	吾妻郡沢田村	日の丸館
滝野川第五	吾妻郡沢田村	山口館
	吾妻郡沢田村	白岩館
	吾妻郡沢田村	流石館
	吾妻郡沢田村	豊島屋
	吾妻郡高山村	法信寺
滝野川第六	吾妻郡沢田村	賽陵館
	吾妻郡高山村	泉竜寺
滝野川第七	吾妻郡沢田村	積善館
	吾妻郡原町	顕徳寺
滝野川第八	吾妻郡沢田村	三木屋
	吾妻郡名久田村	林昌院
滝野川谷端	吾妻郡沢田村	玉泉館
	吾妻郡沢田村	中生館
	吾妻郡沢田村	日向見館
	吾妻郡沢田村	石塚館
	吾妻郡沢田村	三福寺
滝野川田端新町	吾妻郡沢田村	永林寺
	吾妻郡沢田村	丸本旅館
	吾妻郡沢田村	竜鳴館
	吾妻郡沢田村	万屋
	吾妻郡沢田村	積善館
	吾妻郡沢田村	田村旅館



文集「鍋屋の皆様へ」

昭和20年（1945）2月 中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」所蔵

『戦争中の子どもたち』（北区教育委員会）より転載

滝野川第二国民学校6年生が3月の卒業を前に疎開先である鍋屋旅館への感謝の気持ちをまとめた文集。疎開の日々の思い出や戦勝を願う気持ちが絵と文でまとめられている。

09

B29

アメリカのそれまでの爆撃機に比べ、より遠く（約6400km）高く（約1.2万m）速く（約640km）飛べ、大量の爆弾を落とし日本を攻撃した戦略爆撃機。昭和20年（1945年）3月10日の焼夷弾等による東京大空襲をはじめ大阪、名古屋、地方中小都市を次々爆撃、広島、長崎に原子爆弾を投下。その銀色に輝く機体、四発エンジンの轟音に人々はおののき、戦意を失わせたとされます。開発はボーイング社で製造は他二社。スーパーフォートレス、空の要塞と言われました。

10

焼夷弾

木造の家が多かった日本を攻撃するために、アメリカが開発した兵器です。もっとも多く使われたM69油脂焼夷弾は、ナパームという燃えやすいゼリー状のガソリンをつめた長さ約50センチの筒型をしていました。

空襲のとき、焼夷弾は計38本をたばねた状態で飛行機（B29）から落とされました。落下する途中でばらばらになり、広い範囲に散らばった焼夷弾は、屋根を突き破って家の中で発火し、激しい火災を起こしました。油は水では消火しにくく、砂やぬれたむしろをかぶせる必要があります。東京大空襲や城北空襲では大量の焼夷弾が落とされ、多くの人が火災で亡くなりました。

11

建物疎開

空襲のときに火災が燃え広がらないようにし、また、消火活動を行いやすくするため、建物をこわして空き地（防火帯）をつくりました。強制的に建物をこわすので強制疎開ともいいます。北区では、昭和19年（1944）ころから建物疎開が開始され、王子駅から荒川（今の隅田川）に至る幅50メートル・長さ1500メートルの防火帯をつくったほか、赤羽駅東口や線路沿い、軍の施設の周辺などを中心に建物疎開が行われ、多くの家を取りこわされました。（32・33ページ参照）

建物疎開に指定された家には、数日前に通知が届き、拒否することはできませんでした。家具や障子などを運び出した後、柱にロープをかけて人力で引き倒しました。

12

東京大空襲

昭和20年（1945）3月10日の夜中、東京東部の江東区・台東区・墨田区を中心とした下町地域は大規模な空襲を受けました。520機のB29が住宅街をねらって大量の焼夷弾を落とし、下町のほとんどを焼きつくしました。約27万戸の建物が火災によって焼け、多くの人が逃げ込んだ学校や公園などの避難所も火災にあり、9万5000人を超える人が亡くなりました。

北区からも、上野の方の空が空襲で明るくなっているのが見え、飛行機から落とされた焼夷弾がキラキラ光っているのが見えたと話す人もいます。上野に近い田端や西ヶ原の一部も火災の被害を受けました。

